

## 中世後期ドイツ都市の戦時体制と危機の克服

### 15 世紀半ばの帝国都市ニュルンベルクによる

#### 略奪遠征に注目して<sup>1</sup>

田中 碧

#### 1. はじめに

##### 1.1 問題関心

「とりわけ現代に生きる我々よりも、中世という時代に生きた人々は直接的に危機から被害を被っていた<sup>2</sup>」。中世経済史家のゲルハルト・フーケは中世後期における災害と人々に関する著書で、中世人と災害との関わりについて端的に表現している。この著書では、洪水や地震、疫病とならんで戦争もまた一つの災害として提示されている。とりわけ中世後期には都市や農村が武力による圧迫の対象として、幾度となく危機に直面していた。また、ドイツ軍事史家のベルンハルト・クレーナーは、15 世紀半ばの時代を「都市と領邦君主による対立が激化した時代」、「火器の技術や投入を試し、発展させるための“実験場”<sup>3</sup>」とし、中世後期は軍事的な変化が表出した時代として位置づけられている。中世都市史研究、ならびに中世軍事史研究双方からの取り組みにより、諸侯の対抗勢力としての都市について、都市共同体が獲得した軍事高権や市壁を中心とした防衛設備、ならびに市民権に付随した防衛義務といった都市特有の事象に主眼を置く研究が実り豊かな成果をあげている<sup>4</sup>。

##### 1.2 研究動向

近年の中世ドイツ都市史研究を振り返れば、1970 年代からドイツで興隆したいわゆる「社会史」研究の影響がいまなお色濃く感じられることがわかる。皇帝や王、諸侯といった、自領域に止まらない広域的な影響力を有した人物ではなく、都市住民や農民といった、いわゆる「名もなき人びと」のありふれた日常生活や彼らの行動実態、心性に着目する流れは、中世ドイツ都市史研究に携わる歴史家にも大きな影響を与えている<sup>5</sup>。

社会史は都市と軍制という文脈においてもその影響力を示している。15 世紀ケルンの都市軍制を研究したヴペケは、その研究書のタイトルを『15 世紀ケルンにおける軍事制度』としながらも、導入の部分で「このようなテーマが必然的に伴う技術史的な問題を明らかにすることは本研究の課題ではない。重点はむしろ、ケルンの行政、制度、そして社会史といった分野にあるのだ<sup>6</sup>」と述べる。

ヴペケはその研究の中で社会史的観点から都市住民の武装や軍事行為に言及している。ケルンは周辺に領地を有する貴族との契約を通じて、彼らを市外市民として兵力の一部とし、同時に都市の強大な財政力でもって傭兵部隊を雇っていた。傭兵の任務が主に遠征であったことを論拠に、ヴペケは傭兵部隊（遠征用部隊）と市民部隊（防衛用部隊）の役割分担の可能性を示唆している<sup>7</sup>。

フライブルク戦争と都市の軍制について論じたシュルツェは「市民部隊は軍事的に僅かな価値しかない」と述べる。彼によると、「市壁での都市防衛（それは都市住民独自の軍事的任務であった）は訓練の少ない都市住民であっても可能であった。しかし、都市壁の外での平野において、事情は全く異なる<sup>8</sup>」。このように、彼は都市住民の軍事に対する専門性の不足を指摘し、2 名の貴族の派遣と関連させ、都市の戦力増強の方法を論じている。

近年の研究の中で、戦時下の都市住民に最も注目したのはツァイリンガーである。彼は 1449/50 年に生じた南ドイツ諸都市戦争を題材とし、帝国都市ニュルンベルクの軍制と都市住民の戦時の生活を日常史、経験史的視野でもって明らかにしている<sup>9</sup>。

中世後期における都市とその軍制や軍事行動の解明を試みた数々の先行研究から、その時代における戦争への向き合いかたが見てとれる。当事者として戦争に関与したことから明らかのように、中世後期における都市は、都市の平和や自治を維持するために戦争という状況に真正面から向き合い、それを克服しなければならなかった。

以上の研究状況をふまえ、本稿では 1449/50 年の南ドイツ諸都市戦争期における直接的な戦争当事者としての帝国都市ニュルンベルクの戦時体制とその実態に焦点を当てる。この戦争はツァイリンガーが既に対象とした事例であるが、本稿における目的、ならびに着眼点は彼の研究におけるそれとは明確に異なる。彼が社会史的観点のもと、戦時下の人々の日常を明らかにするために、都市の制度やそれぞれの役職に応じた都市住民の語りに注目したのに対し、筆者は危機的状況に対する都市の取り組みや自治維持のあり方を明らかにするため、都市の戦時体

制のあり方のみならずニュルンベルクの部隊による略奪遠征という具体的な軍事活動に注目する。ツァイリンガーの研究はニュルンベルクの戦時体制から都市門閥に代表される都市の個人までを網羅する卓越した研究であるが、惜しむべきは、都市部隊の略奪行動を含めた軍事行動に関する具体的な記述が乏しい点である。都市に住むいかなる人々が、いかなる軍事行動に従事したのかという問いは、未だ重要性を保ち続けている。この戦争では、両軍が真正面から衝突する戦闘ではなく都市の周囲に点在する小都市や農村、集落への略奪を目的とした遠征が頻繁におこなわれた。数多の遠征が都市の戦争遂行のために不可欠の行為であり、またその行為が都市の司令部による意図的な作戦であったとするならば、都市部隊による略奪行為を分析することで、中世ドイツ都市の戦い方、つまりは戦争の克服、あるいは自治維持の方法を明らかにすることができる。本稿は戦時の都市社会の歴史、そして中世都市の軍事の歴史に関連するものであり、従来の研究にてなされてきた防衛設備や防衛義務に注目するのではなく、戦争に対する都市の具体的な取り組みに注目した、一段階踏み込んだ研究である。よって、本研究は中世都市史ならびに中世軍事史にとって有意義なものであるといえよう。

### 1.3 問題提起と研究方法

本論文における課題は以下の通りである。

帝国都市ニュルンベルクとブランデンブルク＝アンスバッハ辺境伯アルブレヒト・アヒレスとの間で生じた南ドイツ諸都市戦争(1449/50)におけるニュルンベルク都市部隊(以下都市部隊)の遠征活動、とりわけ略奪を目的とした遠征を検証する。ミヒャエル・ユッカーは略奪を「中世後期の戦争経済にとって重要な要素<sup>10)</sup>」とし、ノルベルト・オーラーは自身の著作の中で略奪について「近代に至るまで、勝者は占領された、あるいは征服された土地の資源を用いることを認められていた。これは戦争における権利であり、それこそがまさに略奪であった<sup>11)</sup>」と述べている。彼は、戦士自身の生活の維持や老後の備えを略奪行為の目的として挙げているが、ここでは個人の利益、目的が問題となっている。では、集団の代表としての都市部隊がおこなう略奪行為の目的やその遂行方法はいかなるものであったのか。

南ドイツ諸都市戦争期のニュルンベルクの軍制や軍事行動については、おおよそ二つの年代記からその情報を引き出すことができる。一つは、17世紀前半に都市参事会書記として活動したヨハネス・ミュルナーが、当時都市参事会に保管されていた記録を編纂した年代記である<sup>12)</sup>。

もう一つは、19 世紀の歴史家であるカール・ヘーゲルが編纂したドイツ都市年代記のニュルンベルク版である<sup>13</sup>。この戦争期に関する両年代記の記述は南ドイツ諸都市戦争期の最高司令官であったエルハルト・シュルスタブが戦後にまとめた戦報(Kriegsbericht)を元になっている。ミュルナーの年代記はそれに加え、中世後期から近世にかけての都市参事会史料をもとに作成されているだけあり、その南ドイツ諸都市戦争期の軍事行動に関する情報量は膨大である。他方でヘーゲルの年代記は一部ミュルナーの年代記と重複するところがありながらも、軍事行動だけでなく、兵の召集や食糧の備蓄管理など、戦時に求められた諸制度に関する記述が充実している。それに関連して、都市参事会決議録<sup>14</sup>(Ratsverlässe)も、都市の人々が如何に戦争に関与したのかを示す手がかりを得ることができるだろう。

これら史料の性質や種類に関連して、本論文における“戦時体制(Kriegswesen)”の定義をあらかじめ示しておきたい。中世ドイツ都市における戦闘部隊の維持・管理は、一般的に都市参事会に委ねられていた。さらに、ニュルンベルクでは都市参事会員である都市門閥の人々は戦闘部隊の一員として、あるいは部隊長として遠征活動に参加している。このことから、戦時体制の定義を単に部隊編成や武具・兵糧の管理体制に留めるのではなく、戦時に適応する都市参事会体制をも含めた、戦争遂行に関連する都市の諸制度と設定する。

なお、本論文における研究範囲、とりわけニュルンベルクの遠征活動に関する対象範囲を、辺境伯アルブレヒトが帝国都市ニュルンベルクに対して宣戦布告状(Absagebrief)を送った 1449 年 6 月 29 日から、バンベルクにて事実上の和平協定が提示された 1450 年 6 月 22 日前後の約 1 年間と設定する。帝国都市ニュルンベルクの略奪行為を分析するにあたり、まず 15 世紀半ばの都市参事会制度を軍事的職務との関わりに触れつつ示す必要がある。次にニュルンベルクが有した軍事力、特に戦士としての都市住民や様々な兵科に注目して詳述する。そして、ニュルンベルクの略奪行為を地理的、社会的観点から分析し、最後に略奪行為の意図や影響をまとめた

#### 1.4 南ドイツ諸都市戦争について

本論に入る前に、本論文の対象である南ドイツ諸都市戦争の概要を述べておきたい。ニュルンベルクは辺境伯アルブレヒトより、1449 年 6 月 29 日付けの宣戦布告状<sup>15</sup>を受け取った。そこでは帝国都市ニュルンベルクとコンラート・フォン・ハイデックに対する敵意を表明している

が、1449 年 6 月 15 日のバンベルク会議において、彼は既にニュルンベルクに対する抗議項目を挙げている<sup>16</sup>。とりわけ、彼はニュルンベルクとの関係性において、父であるブランデンブルク選定侯フリードリヒ 1 世の遺産を強調した。フリードリヒ 1 世は選定侯であると同時に、ニュルンベルク城伯フリードリヒ 6 世としての地位を有していた。1427 年にフリードリヒ 1 世は 14 万金グルデンという額で城と諸権利をニュルンベルクの都市参事会に売却し、その結果ニュルンベルク城伯としての地位は事実上消滅した<sup>17</sup>。しかし、辺境伯アルブレヒトがニュルンベルクに対する宣戦布告状においてニュルンベルク城伯の名をもちだし、ニュルンベルクにおける自己の権利の正当性を訴えている事からも、彼のニュルンベルクに対する執着心を垣間見ることができる<sup>18</sup>。その権利の主張が正当なものであるかどうかにかかわらず、これが戦争の要因の一端であったことには間違いない。

宣戦布告状の交換後程なくして、両陣営による遠征、略奪戦が始まった。この戦争において、両陣営が総力をもって衝突する機会は 1449 年 3 月 11 日のピレンロイト池畔の戦いまで無かったに等しい。ニュルンベルクが勝利を収めたこの戦い以後、辺境伯側の劣勢が目立つようになる。それから約 3 ヶ月後、戦争開始から約 1 年が経つ 1450 年 6 月 22 日に、バンベルクにて和平協定が提示されることとなる<sup>19</sup>。

## 2. 15 世紀半ばにおけるニュルンベルクの戦時体制

### 2.1 参事会体制

中世後期ニュルンベルクの都市参事会の組織形態やその職務の内容に関しては、既に多くの研究蓄積がある<sup>20</sup>。それらの研究はドイツ人のみならず日本人研究者によってもなされており、とりわけ佐久間弘展が都市参事会への諸権利の移行過程を研究し、田中俊之はニュルンベルクの都市参事会に属するいわゆる都市貴族(Patriziat)とその名誉に関する論文を発表している<sup>21</sup>。本論稿では紙面の都合上都市参事会組織全体に関する記述は最低限におさえ、参事会制度の中でもとくに軍事に関する職務を中心に取りあげることにする。

ニュルンベルクの都市参事会は一般的に、200-400 名規模の大参事会(Größerer Rat)と、都市門閥家系から 26 名、大参事会から 8 名(この 8 名も都市門閥家系で占められる)、手工業者から 8 名の計 42 名からなる小参事会(Innerer Rat)の二つに分けられる。小参事会の中には先に記した門閥家系の 26 名から選抜された 7 名からなる機密参事会(Geheimer Rat)も存在し、階層的な組

織形態であったことが窺える。

また、戦争期においてとりわけ重要な委員会が 1449 年 7 月 3 日に小参事会員を中心として組織された。この委員会は戦争委員会(Kriegsstube)と称され、戦争期のみ組織される臨時委員会としての性格を有していた。この委員会は情報機関を含めた戦争遂行の任を負い、またその遂行や情報収集、発信のためにその他機関による適切な支援を得ていた。戦争委員会における決定は後述の戦争役(Kriegsherren)らによりなされるか、あるいは小参事会へ検証を依頼し、議論の未決定することもあった。平時においては常設の役職として 3 名の最高指揮官<sup>22</sup> (Oberste Hauptleute)が軍事的な執行権を有するが、戦時には臨時委員である戦争役が上位に置かれる仕組みになっていたとツァイリンガーは記している<sup>23</sup>。

この委員会に属する人員が戦争役と称され、5 名の小参事会員、1 名の手工業者からなる計 6 名が選出されている<sup>24</sup>。どの人物が戦争役へと選出されるのかについては、その選出理由を明示した史料が存在しないため各々の経歴から推測するほかない。たとえば戦時報告を記したエルハルト・シュルスタープは 1444 年にフェーデ行為をはたらく領主ヴァルデンフェルスに対する遠征に参加した<sup>25</sup>。リヒテンブルクへ向かうその遠征に際して、シュルスタープは都市部隊の隊長であった<sup>26</sup>。ベルトルト・フォルカーマーは 1438 年のローマ王アルブレヒト 2 世(1397-1439)によるボヘミア遠征の際にニュルンベルク部隊の隊長として戦場へ向かった。フライシュマンも述べるように、この軍事経験がフォルカーマーを戦争役へと導いたのだろう<sup>27</sup>。その他の人物に関する軍事的な経歴は明らかになっていないが、カール・ホルツシューハーは都市参事会員として勤めを始めてから数多くの会議や儀礼の場に参加している。とりわけ、1441 年のマインツ帝国議会への出席、1442 年にローマ王フリードリヒ 4 世（後の神聖ローマ皇帝フリードリヒ 3 世）が初めてニュルンベルクを訪れた際の出迎え、その翌日にニュルンベルク城で催されたレセプションの代表者、そしてフリードリヒの団に帯同し、戴冠式が催されるアーヘンへの旅を遂行するなど、彼は数多くの外交的成果を短期間で挙げた<sup>28</sup>。このように、戦時の意思決定機関であった戦争役には、総じて軍事・外交経験の豊かな人物が選出されていたようである。

## 2.2 都市内部における戦争準備

当時のニュルンベルクは 8 つの地区(Viertel)を有し、それぞれに 2 名の地区長(Viertelmeister)が割り当てられた。彼らは管理区で戦力となり得る人間や防衛設備の把握に努めた<sup>29</sup>。彼らの下

には数名の街路長(Gassenhauptleute)がおり、地区長の命を受けて実働的な役割を果たした。街路長はその地区の中で担当する区域を割り当てられ、有事の際にはあらかじめ作成した動員名簿をもとに召集をかけたのだが、この名簿には能力や素質ごとに三段階に区分された住民の名前が記載されていた<sup>30</sup>。召集の際にはその地区が担当する市壁や塔、門での警備についている人員を除き、待機している人員が対象となった。こうして召集された都市住民を地区の集合場所に集めたのち、地区長は都市全体の集合地へと彼らを引率し、本隊の指揮者に人員を委ねたのである<sup>31</sup>。

召集される都市住民は、原則的に武具を自前で用意した。経済的な理由から武具を用立てられない都市住民に対しては、有事の際に都市参事会が都市の武器庫を開き、彼らに貸し出す形で装備を整えさせていた<sup>32</sup>。また、都市召集部隊に属さず、都市参事会から給与を受け取る形で戦地に向かう都市住民もいた。副業戦士として雇われるか否かは、その社会的地位ではなく、もっぱら戦争遂行能力（ここでは主に武器の取り扱いを指す）に応じて決定された<sup>33</sup>。しかし、彼らが本来召集部隊に動員されるはずであった場合には、彼の召集部隊枠の補填のために代理を立てることが求められた<sup>34</sup>。

こうした人的な戦争準備とならんで、都市では物的な戦争準備も進められた。ニュルンベルクは戦争の気運が高まると共に、市壁内にいる人数と彼らが有する穀物量の調査を実施したが、この調査は都市が包囲された場合にどれほど長くその包囲に耐えられるか、という考慮に基づき実施された<sup>35</sup>。この考慮からは、都市の包囲戦を想定し都市の戦争継続能力を把握せんとする都市参事会の戦略が読み取れる。

### 2.3 15世紀半ばのニュルンベルクにおける戦力

15世紀半ばのドイツ都市、とりわけニュルンベルクの財政、都市部隊や軍制について言及したのがパウル・ザンダーである。彼は1902年に出版された研究書<sup>36</sup>にて1431-1440年度の都市会計録(Stadtrechnungen)から当時の財政状況を明らかにしているが、彼は1449/50年の戦争時の会計や行政状況に関しても言及している。

ザンダーはこの書の中で召集部隊や防衛義務者に触れている。彼によると、防衛義務者達はそれぞれの社会的地位、個々人の能力、武具の所有状況に応じて、異なる配置についていた<sup>37</sup>。例えば、大参事会のメンバーを総称するゲナンテン(Genannten)は防衛拠点での責任者として配



置され、或いは戦時隊長(Kriegshauptleute)の補佐として、部隊の召集や配置などの際に実に様々な活動を求められた。その他の防衛義務者は普通の戦士(gemeine Soldaten)として前線に送られた。さらに、銃や砲の製造に携わる手工業者は特段の地位を有していた。彼らは戦時になると火器管理長(Büchsenmeister)として数多くの火器の管理を任されていたからである<sup>38</sup>。

都市年代記やザンダーの研究により、都市部隊が辺境伯軍に対して戦果を挙げたピレンロイト池畔の戦いにおける部隊編成が明らかになっている。それによれば都市部隊はおおよそ騎馬隊・歩兵隊・砲兵隊・輜重隊に分類される<sup>39</sup>。

この記述からはニュルンベルクの各部隊には都市住民が参加していたことがわかる。とりわけ貴族であり、傭兵であったロイス・フォン・プラウエン<sup>40</sup>、都市参事会員のゲオルク・ハラー(彼の死後はヨープスト・テッツェル)指揮下の騎馬隊には現役の都市参事会員をも含む壮年の都市門閥家系の人々が、金で雇われた傭兵と名を連ねていた<sup>41</sup>。騎馬隊は野戦の際には先陣を切って敵と衝突する部隊であり、多大な危険を負った。都市門閥家系のクリストフ・イムホーフは1449年11月11日にツェンでの敗北の際に死亡し、ヴィルヘルム・ハラーは1449年11月24日の小規模な戦闘で矢を受け、3日後に死亡した<sup>42</sup>。さらに、都市門閥家系の人物が隊長を務めた3種の歩兵隊には青年の都市門閥家系出身の人達が参加していた<sup>43</sup>。こうした、騎馬隊への都市参事会員ならびに都市門閥の参加や、戦闘の専門家である傭兵ではなく都市門閥を隊長として任命することの意義についてここで多く語ることはできないが、都市門閥の有する象徴的役割が手がかりとなろう。いずれの歩兵隊にも都市住民が参加していることから、それを指揮する人物には戦術的な素質のみならずカリスマ性も求められたと推察される。

また、歩兵隊に配置された小銃隊、さらには車陣部隊に配置された砲兵隊の存在から明らかに、ニュルンベルクでは火薬を用いた兵器の投入が見受けられる。小銃隊には700名の人員が配置され、砲兵部隊には、8頭引きの重砲2台・4頭引きの中型砲3台・3頭引きの中型砲2台・2頭引きの小型砲7台・3頭引きの盾付き砲2台、そして2頭引きの鉛玉用の火砲4台が配置され、それぞれの砲列には砲弾を運ぶ部隊が付随していたことがその証左である<sup>44</sup>。こうした兵器の整備や投入を支えていたのは、この節のはじめに述べた都市に住む手工業者達であった。こうした火器の生産や配備状況は、本論文のはじめに述べたクレーナーによる「火器の技術や投入を試し、発展させるための“実験場”」を体現しているように見えるが、奇妙なことに中世ドイツ軍事史研究はこれまで都市の戦力や兵科の配置状況に関してほとんど触れていな



い<sup>45</sup>。そうした状況を鑑みれば、ここで記したニュルンベルクの戦力のみならず、他都市の戦力や兵科の配置状況は中世ドイツ軍事史研究に対して新たな視座をもたらす可能性を有している。

これら上で述べた戦闘部隊と並び、彼らを支える輜重隊の存在も忘れてはならない。輜重隊には主に兵站の補給に関連する荷車が配置された。そこにはそれぞれ4頭引きの野戦炊事用の車12台・パン供給用の車18台・荷車や、おそらく獲得物を積むためのなにも積んでいない車計12台が配置された。更に、調理人として5名の調理係、10名の調理手伝い、6名の肉屋、野戦鍛冶として2名の鍛冶屋、1名の馬車製造人、負傷者保護と司牧として2名の聖職者、3名の外科医が控えていた。その中でも、特に肉屋の役割は平時に比べ格段に増加していた。遠征先での肉屋の役割は後述するが、都市部隊の遠征に肉屋が帯同することは、その間は都市内部で活動する肉屋の減少をもたらした。こうした状況に対応するため、都市参事会はよそから肉屋を雇う形で人員を補充していた<sup>46</sup>。

こうして、ニュルンベルクは騎兵隊、歩兵隊、砲兵隊とそれらを補佐する輜重隊を組織することで、軍事的手段の行使を可能とした。それでは、ニュルンベルクはこれらの兵科を用いていかなる軍事行動を実践したのだろうか。

### 3. ニュルンベルク都市部隊による遠征と略奪行為

#### 3.1 遠征先・期間

この戦争期にはニュルンベルク自体に大きな被害はなく、むしろ周辺領域の小都市や集落が戦渦に巻き込まれた。フライブルク・イム・ブライスガウとサヴォイエン伯の戦争において野戦はおこなわれず、戦いの形式はもっぱらフライブルクに対する包囲戦と、両陣営における小規模の戦闘集団による略奪であった<sup>47</sup>。同様に、南ドイツ諸都市戦争においても野戦はほぼ実施されず、戦争期を通して略奪を目的とした遠征が幾度となく実践された。

ツァイリンガーによれば、この戦争期における都市部隊の遠征は、一般的に都市からおおよそ20-30km圏内にて1日、あるいは2日の行程であり、ツァイリンガーはこの距離と日程が中世における部隊の移動能力に適するものであったと述べている<sup>48</sup>。この論は、ノーラーの初期近世における各兵科の平均時速と1日の進軍距離に関する考察によって補強される<sup>49</sup>。それによれば、歩兵は早くとも一時間で10-12kmほどの距離しか進むことができず、1日の行軍距離でも50-60kmが試算されている。他方で馬による移動距離は一時間で20-25kmが試算されている。

それをふまえて、ツァイリンガーは 1449 年 10 月 1 日、2 日の遠征距離に着目している<sup>50</sup>。ニュルンベルクから北へ約 50km に位置するポッテンシュタインや南東約 35km に位置するノイマルクトなど一般的な遠征距離を遙かに超えた遠征を実行していることから、彼はニュルンベルクの遠征継続能力に一定の評価を与えている。しかし、こうした長距離遠征はこの日だけに留まらない。史料記述によれば、1449 年 8 月 6 日には既に、騎馬隊がペグニッツ（直線距離で約 47km）へと遠征し、村落を焼き討ちにしている<sup>51</sup>。1449 年 11 月 3 日には、騎馬隊長のロイス・フォン・プラウエン率いる騎馬隊が、オノルツバッハ、そしてヴィンツハイムまでの村落を焼き討ちにし、その後数日の間でローテンブルク（直線距離で約 64km）、キッツィンゲン（直線距離で約 74km）、そして最終的にはヴェルツブルク近郊のハイディングスフェルド（直線距離で約 88km）にまで進軍している。この遠征は、都市に戻らずに宿営を繰り返しながら移動したものと推察される。

次に約 1 年に及ぶ戦争期に都市部隊が関与したと思われる遠征について表と地図を掲げる<sup>52</sup>。距離別に分類した表（表 A）からは、約 8 割の遠征先が半径 30km 圏内の小都市や農村集落であったようである。一方、半径 31km-40km 圏内や半径 41km 以上の目標に対する遠征の割合は戦中を通しておよそ 1 割と決して高くはないものの、遠征部隊が守るべき自都市を離れるリスクや、道中における敵勢力との遭遇という危険性を考慮に入れば、こうした遠方地域における略奪対象は、決して少ないとは言えない。

また、各月ごとの遠征対象数を示した表（表 B）からは、略奪遠征の傾向が鮮明に浮かび上がる。それによると、略奪遠征はおよそ 1449 年 10 月-同年 12 月、ならびに 1450 年 3 月-同年 5 月のそれぞれ 3 ヶ月間に集中して実施されていた。このような遠征対象数の偏りは、政治的・ならびに自然環境条件によって生じたものである。1449 年 9 月の遠征が極端に少ない理由として、同年 8 月 15 日にラウインゲンで仲裁のための会議が催されたことが挙げられる。そこではローマ王フリードリヒ 4 世によって組織された仲裁委員会がニュルンベルク、アルブレヒト双方に停戦を呼びかけ、1449 年 8 月 28 日から 1450 年 9 月 29 日のおおよそ 1 年間の平和を求めたのであった<sup>53</sup>。アルブレヒトはこの協定に同意する姿勢を示したが、ニュルンベルクはその内容の不当性を理由に協定を拒絶し、ローマ王フリードリヒ 4 世に直接働きかけをおこなった。その後、ニュルンベルクの遠征活動は 1449 年 9 月 19 日から再び確認されるようになるが、こうした一連の出来事が原因となり、遠征活動が中断されていたと考えられる。また、1450 年

1月-同年2月の遠征回数は寒さや降雪などの影響により極端に減少したものと推察される。

表 A. 都市部隊による距離別襲撃対象数

	1449年			
遠征距離	半径30km圏内	半径31～40km圏内	半径41km～	合計
襲撃対象数	62	14	15	91
割合	68%	15%	16%	100%

  

	1450年			
遠征距離	半径30km圏内	半径31～40km圏内	半径41km～	合計
襲撃対象数	68	7	6	81
割合	84%	9%	7%	100%

  

	総計			
遠征距離	半径30km圏内	半径31～40km圏内	半径41km～	合計
襲撃対象数	130	21	21	172
割合	76%	12%	12%	100%

(Müllners Annalen ならびに Die Chroniken より作成)

表 B. 都市部隊による月別襲撃対象数

	1449年					
月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
襲撃対象数	6	13	2	22	19	29
割合	3%	8%	1%	13%	11%	17%

  

	1450年					
月	1月	2月	3月	4月	5月	合計
襲撃対象数	8	8	20	22	23	172
割合	5%	5%	12%	13%	13%	100%

(Müllners Annalen ならびに Die Chroniken より作成)

Map of the region around Regensburg, showing the Pegnitz and Rednitz rivers and various settlements. The map is divided into three concentric circles representing distances from Regensburg: 0-30km (innermost), 31-40km (middle), and 41km+ (outermost). Settlements are marked with dots for 0-30km, open circles for 31-40km, and open circles with a dot for 41km+. The map includes labels for numerous towns and villages, such as Regensburg, Landshut, and various smaller settlements. A legend in the bottom right corner explains the distance markers. A north arrow is also present.

— 102 —

に遠征を実施していた。それでは、こうした遠征活動の遂行にとって重要な要素はいかなるものであったのだろうか。

その際に注目するのは、本稿 2.3 ですでに述べた、輜重隊の存在である。その中でも特に、肉屋が遠征に帯同していたことが都市の遠征活動をより具体的にイメージする手がかりとなる。戦時中の肉屋に関する記述は、シュルスタープの戦報のなかに見出せる。それによると、遠征に帯同させる肉屋には雇われ歩兵(Fußknecht)と同額の賃金が与えられ、現地にて屠殺をおこなうことが求められていた<sup>55</sup>。この、肉屋が現地で屠殺をおこなうという行動は、遠征部隊にとって二つの役割を有していた。一つは、遠征先で兵站として、家畜を食肉加工する役割である。彼らが皮剥をすることによって、同時に帯同していた料理人による肉の調理が可能になることから、肉屋が隊員達の健康や士気の維持を下支えしていたと言えよう。さらに、肉屋の皮剥は部隊の生存に密接に関わる仕事であった。後述するように、都市の部隊による略奪遠征では場合によっては数百の単位で家畜を略奪し、都市に運んだ記述が見られるが、ノーラーの行軍速度に関する試算からも明らかのように、牛や豚といった動物の移動速度は馬や歩兵の移動速度と比較すれば遅いものであった<sup>56</sup>。部隊の移動速度が遅くなればなるほど襲撃された際の被害は相対的に増すために、たとえ多くの家畜を獲得した場合でも極力部隊の移動速度を落とさない試みが必要であった。そこで、肉屋が重要な役割を果たすことになる。すなわち、獲得した家畜を現地で屠殺し荷車で運べる状態にまで加工することで、部隊の移動速度の極端な低下を抑えることができたのである。ザンダーが図にて示した、なにも積んでいない荷車が配備されていたことを考慮に入れば、この荷車はおそらく略奪品を運ぶために準備されたと推察することができる。

このように、ニュルンベルクによる略奪遠征に際して、疲弊や騎兵のみならず、彼らを支援する輜重隊の存在もまた作戦遂行に不可欠な構成要素であった。自明ではあるが、様々な兵科の配置やその充実は都市の有する人的・物的資源の豊かさや、都市の経済力に基づいている。

### 3.2 襲撃対象

このように、ニュルンベルクの遠征は単に自都市周辺の防衛のみならず、敵方の領地にまで攻め込むものであった。ここでは、都市部隊が遠征先にていかなる対象を襲撃したのかを明らかにする。

遠征先での襲撃対象はその対象の規模にもよるが、村落であればその村ごと焼き落とされた。1449年9月29日の遠征におけるブーシェンドルフ・エムズキルヒェン間の村落焼き討ち<sup>57</sup>や、同年12月26日のブルンの焼き討ち<sup>58</sup>のように、村落自体が襲撃目的となる場合もあれば、1450年4月28日にスイス傭兵<sup>59</sup>と共に都市部隊が辺境伯軍と交戦し、辺境伯軍を追撃した際には、進軍と同時に多くの村落が焼き落された<sup>60</sup>。また、1449年10月19日にカドルツブルクに進行した際、都市部隊はその地で多くの家々を焼き討ちにしており、こうした行為は他の遠征においても頻繁に確認することができる<sup>61</sup>。

興味深いことに、こうした村落や家々の焼き討ちとならんで水車の破壊が都市部隊によって頻繁におこなわれた。例えば1449年8月6日のカドルツブルク周辺における家屋や水車の焼き討ち<sup>62</sup>や、同年8月31日に騎馬隊長のロイス・フォン・プラウエン率いる騎馬隊がニュルンベルクの南西に位置するシュバーバッハへ進軍した際には、その地で水車を焼き落とし、100頭の家畜と捕らえた農民を都市へ運んだと報告がされている<sup>63</sup>。同年12月19日の遠征では複数の部隊が別々の地域へ同時展開されたが、一部隊がブレヒという市場集落とならんで、複数の村や水車を焼き落としている<sup>64</sup>。さらに1450年2月26日にはニュルンベルクの歩兵隊がラウブ近郊の水車を焼き落とし、3月8日には騎馬・歩兵の混合部隊がジンメルスドルフやグゼーといった集落の焼き討ちに加え、ローテンベルク近郊にて村落・水車を焼き払った<sup>65</sup>。

継続しておこなわれた水車の破壊活動は村落や家屋のそれとは異なり、住民や敵軍の生活や生命に直接影響を与えるものではない。では、水車の破壊活動は何を意図しておこなわれたのか。

それを明らかにする手がかりとして、1449年12月31日の遠征活動と1450年3月19日のアルブレヒトによるシュバインフルト都市参事会への働きかけが重要な手がかりとなる。12月31日の遠征では、25名のニュルンベルク騎馬兵がノイホーフ・エルラーバッハ間で6基の水車を燃やした。その水車小屋の中では大量の穀物が焼き払われている<sup>66</sup>。この記述からは、水車だけでなくそこに貯蔵されていた穀物をも焼き払ったことが確認できる。パンなどの食糧を安定して供給するためにも、水車を用いた製粉作業は平時のみならず戦時においても特に重要であった。実際にこうしたニュルンベルクの軍事行動は敵方の戦争遂行に障害をもたらした。アルブレヒトはシュバインフルトの都市参事会に対して100マルテルの穀物と、ワインやオート麦を提供するよう求めている。これには辺境伯軍に蔓延した食糧、水車不足を解決しようとする意

図があったが、ニュルンベルクの都市参事会が彼の行動を知ると直ちにシュバインフルトの都市参事会へ彼を援助しないように働きかけたのである<sup>67</sup>。つまり、都市部隊による水車の破壊活動は、辺境伯の領地にてなされるはずの製粉作業を阻害し、敵方の食糧供給に打撃を与えようとする意図があったと考えることができる。総じて、都市部隊による村落、家屋や水車の物理的な破壊は、生活・生命を脅かす直接的な攻撃と共に、食糧供給を絶つという間接的な攻撃という二つの面を有していたのである。

### 3.3 略奪対象

ピレンロイト池畔の戦いを代表とする野戦は確かにその後の戦局を左右する重大な戦闘であったが、日々おこなわれる遠征活動もまた、両陣営に対して多大なる影響をもたらした。ニュルンベルクの周辺領域における破壊活動は単に直接的な被害に加え、敵側の戦争遂行能力を低下させる効果があった。同時に、この遠征活動は略奪品という利益をももたらす活動でもあった。ここでは都市部隊がいかなる対象を略奪し、都市へ運んだのかを明らかにしたい。

3.1の表でも示したように、約1年に及ぶ戦争の中で都市部隊は幾度となく、そして多方面に遠征を繰り返した。そして、遠征活動ではほぼ毎回にわたり略奪をおこない、都市に物的利益をもたらしている。略奪行為の中で最も多く獲得した品は牛、馬、羊、山羊といった家畜であった。1449年7月22日には、ニュルンベルクの歩兵隊がヒルトポルトシュタインやデュースブルンといった集落やその周辺地域において、大規模な略奪をおこなっている。そこでは、牛、馬、羊を計1300頭獲得し、都市へ運んだ<sup>68</sup>。また、その3日後の7月25日には辺境伯側についていたハンス・ヴォルフシュタインの領地であるピルバウムへ遠征をおこない、そこでは牛と馬を計300頭略奪し、都市へ運んだのであった<sup>69</sup>。

その他の略奪に関する記述を辿ると、家畜ほどの数ではないものの農民や敵の兵士を捕らえ、都市に連れ帰る姿も見取ることができる。1449年12月18日には、歩兵隊がロート・キュードルフ間で50頭の牛と馬、そして農民を捕らえ<sup>70</sup>、1450年5月1日には騎馬隊と歩兵隊がホーレス、ローテンベルクそしてオステルノーエにて19頭の牛、3頭の農耕馬、豚や羊といった略奪品に加え、農民をも捕らえている<sup>71</sup>。都市へ運ばれた農民のその後についての記録は残されていないが、恐らく敵方の情報を手に入れるために利用されたと推察される。同時に辺境伯領内における生産の担い手である農民を都市の領域に引き込むことで敵方の陣営に対する間接的な



被害を与えることができただろう。

1450年3月11日におこなわれたピレンロイト池畔の戦い<sup>72</sup>の後にも、この戦いに勝利した都市部隊によって略奪がおこなわれた。そこでは、150頭の騎馬、大量の鎧と弩、胸甲や長柄武器、そして魚を積んだ荷車が略奪対象となっていた。また、敵の軍旗もまた都市へ持ち帰り、都市参事会館や聖母教会など、都市のシンボルとなる建物に掲げられた<sup>73</sup>。「旗というものは今日においてもなお凱旋の印であり、敵に対する勝利の記念品である<sup>74</sup>」とユッカーが述べるように、相手方の軍旗を持ち帰るという行為は、それ自体が儀礼的な意味を有している。

都市の略奪行為を振り返ると、その目標の大半が家畜であることがわかる。戦闘に勝利した場合、都市部隊は戦場に残された馬や武具、そして勝利の証である軍旗を回収した。村落からは家畜だけでなく、農民も略奪対象となった。これらの略奪品は、敵の戦力や戦争継続能力を低下させると同時に、都市の戦争継続を可能とさせるもの（食糧・武具の確保、情報の提供）であったと考えられる。

## おわりに

以上、本論文では南ドイツ諸都市戦争時のニュルンベルクの戦時体制、そして戦争中に幾度となく実施された略奪遠征の意図や実態を明らかにした。最後に、これまで述べてきたことをまとめておきたい。

ニュルンベルクの都市参事会は、戦争状態に突入すると同時に都市参事会員の中から軍事経験者・外交的成果を挙げた6名を戦争役として任命し、独自の委員会を組織した。彼らの主導のもと、各地区長と街路長が自らの担当の地区を統括し、必要に応じて各地区から召集部隊の組織をおこなった。地区長や街路長は小参事会、あるいは大参事会から選出されており、都市門閥を中心としたニュルンベルク都市参事会体制は戦時においてもその指導的地位は健在であった。

こうした都市門閥の指導的地位は、遠征時にも一定の役割を果たしていた。都市部隊の各兵科には都市住民が参加していたが、都市門閥家系はとりわけ騎馬隊と歩兵隊にそれぞれ人員を輩出していた。先陣を切る騎馬隊への参加や、歩兵隊における隊長職の遂行は、彼らの戦闘遂行能力だけでなく、都市住民に対して都市門閥の地位や威厳を鮮明にする役割を果たしていたと考えられる。

組織された部隊は、距離や目的によって隊を分散させ、戦争中に幾度となく遠征を繰り返した。都市部隊の遠征は日帰りか長くても2、3日の旅程であったが、都市から約30km以上離れた目標へも度々侵攻した。その移動距離、頻度は特出したものであり、それを可能としたのは十分な部隊編成と、肉屋のような、部隊を下支えする非戦闘員であった。

ニュルンベルクは敵陣営の拠点を占拠し、支配領域を広げる陣取り合戦のような戦い方ではなく、むしろ敵方の拠点や村落を焼き払い、敵の戦争継続能力をそぎ落とすことに尽力していた。とりわけ、敵方の勢力圏内における水車の破壊や農民の捕縛がその試みの成功に貢献していたと言える。敵方の本拠地を直接攻略することのなかったニュルンベルクにとって、食料供給の根本を断つ行為は持久戦の様相を呈する状況下において必要不可欠なものであった。

しかしながら、こうした遠征は単に敵方に被害をもたらすものではなかった。こうした遠征は同時に、ニュルンベルクの食糧供給に利益をもたらす略奪を行う機会でもあった。農村における略奪対象はもっぱら家畜であり、戦闘が生じた場合には敵方の軍馬のみならず、武具や軍旗を都市に運んだ。

このように、戦争中のニュルンベルクの遠征活動を明らかにすることによって、以下の事が言えるだろう。南ドイツ諸都市戦争期のニュルンベルクによる略奪は、オーラーが表現したそれとは本質的に異なる。彼が述べた略奪は個人のため、戦いの後の生活を見越したものである一方で、都市部隊による略奪は都市共同体のため、目の前にある危機を克服するための略奪だった。開戦直後に実施した調査は都市が包囲された場合を想定した都市参事会の戦略の表れであり、実際にニュルンベルクは直接的な野戦や敵の本拠地を攻撃する選択ではなく、広範囲における略奪遠征を通じた持久戦を選択し、実践した。略奪遠征は敵方の戦争継続能力を削ぐと同時に、自らの戦争継続を可能とさせる行為であったと言える。

---

<sup>1</sup> 本研究は、独立行政法人日本学術振興協会の日独共同大学院プログラムの支援を得た。

<sup>2</sup> Fouquet, Gerhard / Zeilinger, Gabriel, *Katastrophen im Spätmittelalter*, Darmstadt / Mainz 2011. ここでは S. 11.

<sup>3</sup> Kroener, Bernhard, *Kriegswesen, Herrschaft und Gesellschaft 1300-1800*, München 2013, S. 12f.

<sup>4</sup> 都市領主から都市共同体への軍事高権の移行に関しては Sander, E., *Die Wehrhoheit in den deutschen Städten*, in: *Archiv für Kulturgeschichte* 36(1954), S. 333-356. 都市の防衛設備については Isenberg, G. / Scholkmann, B. (Hg.), *Die Befestigung der mittelalterlichen Stadt*, Köln 1997; Koller, H., *Die mittelalterliche Stadtmauer als Grundlage städtischen Selbstbewusstseins*, in: Bernhard K./ Günther S. (Hg.), *Stadt und Krieg*, Sigmaringen 1989, 9-26. 市民の防衛義務については Conrad, H., *Geschichte der deutschen Wehrverfassung*, München 1939 が詳しい。中世都市に関する概説書については Engel, E., *Die deutsche Stadt des Mittelalters*,

München 1993; Isenmann, E., *Die deutsche Stadt im Mittelalter 1150-1550. Stadtgestalt, Recht, Verfassung, Stadtrecht, Kirche, Gesellschaft, Wirtschaft*, Köln/Weimar/Wien 2012 がある。

<sup>5</sup> Goetz, H.-W., *Leben im Mittelalter vom 7. bis zum 13. Jahrhundert*, München, 1986; Althoff, G./ Goetz, H.-W./Schubert, E., *Menschen im Schatten der Kathedrale: Neuigkeiten aus dem Mittelalter*, Darmstadt 1998.

<sup>6</sup> Wübbeke, B. M., *Das Militärwesen der Stadt Köln im 15. Jahrhundert*, Stuttgart 1991. ここでは S. 31.

<sup>7</sup> Ebd., S. 231, 234.

<sup>8</sup> Schulze, W., Freiburgs Krieg gegen Savoyen 1447-1448: kann sich eine mittelalterliche Stadt überhaupt noch einen Krieg leisten?, in: *Freiburger Geschichtsblätter* 79(2002) S. 7-55. ここでは S. 34.

<sup>9</sup> Zeilinger, G., *Lebensformen im Krieg. Eine Alltags- und Erfahrungsgeschichte des süddeutschen Städtekriegs 1449/50*, Stuttgart, 2007.

<sup>10</sup> Jucker, M., Plünderung, Beute, Raubgut : Überlegungen zur ökonomischen und symbolischen Ordnung des spätmittelalterlichen Kriegs, 1300-1500, in : *Schweizerische Gesellschaft für Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, 23 (2008) , S. 51-69. ここでは S. 63.

<sup>11</sup> Ohler, N., *Krieg und Frieden im Mittelalter*, München 1997, S. 275.

<sup>12</sup> Johannes Müllner. *Die Annalen der Reichsstadt Nürnberg von 1623*, T. 2: Von 1351-1469, Hirschmann, G. (Hg.), Nürnberg 1984 (以下 Müllners Annalen) .

<sup>13</sup> Hegel, K. v. (Hg.), *Die Chroniken der fränkischen Städte. Nürnberg*, Bd. 2, Leipzig 1864 (以下 *Die Chroniken*) .

<sup>14</sup> Stahl, I. (Hg.), *Die Nürnberger Ratsverlässe, Heft 1: 1449-1451*, Neustadt a. d. Aisch 1983.

<sup>15</sup> Müllners Annalen, S. 420; *Die Chroniken*, S. 514.

<sup>16</sup> 紙面の都合上詳述しないが、ミュルナーの年代記によると辺境伯はおおよそ 10 の項目を争点として挙げていた。Müllners Annalen S. 415.

<sup>17</sup> Kölbel, R., Der erste Markgrafenkrieg 1449-1453, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg* 65(1978), S. 91-123. ここでは S. 104.

<sup>18</sup> Müllners Annalen, S. 420. 宣戦布告状の書き出しには、*„Albrecht, von Gottes Gnaden Markgraf zu Brandenburg und Burggraf zu Nürnberg“*とある。

<sup>19</sup> Müllners Annalen, S. 476-478.紙面の都合上協定の内容は割愛するが、主に戦争中に占領された村落や拠点の帰属や、被害に対する補償、捕虜の処分に関する事項が決定された。

<sup>20</sup> Endres, R., Verfassung und Verfassungswirklichkeit in Nürnberg im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit, in: *Verwaltung und Politik in Städten Mitteleuropas*, 1994, S.207-219; Fleischmann, P., *Rat und Patriziat in Nürnberg. Die Herrschaft der Ratsgeschlechter vom 13. bis zum 18. Jahrhundert*, Nürnberg 2007; Hirschmann, G., Das Nürnberger Patriziat, in: Rössler, H. (Hg.), *Deutsches Patriziat 1430-1740*, Limburg 1968, S. 257-276. フライシュマンの研究に代表されるように、ニュルンベルクの都市参事会とそれに属する都市貴族とは密接な関連性を有していることがわかる。

<sup>21</sup> 佐久間弘展「中世後期ニュルンベルクにおける参事会都市支配の確立」『西洋史論叢』 第 8 号 (1986 年) : 48-62; 田中俊之「中世後期ニュルンベルクの都市貴族と「名誉」」『史林』 第 80 巻 第 6 号 (1997 年 11 月) : 840-873. なお、都市貴族と都市門閥(Geschlechter)は同様の家系を指す言葉であるが、本論稿では都市門閥を用いる。

<sup>22</sup> 彼らは上述の機密参事会から選出された。

<sup>23</sup> Zeilinger, *Lebensformen*, S. 53.

<sup>24</sup> *Ratsverlässe*, S. 161.

<sup>25</sup> ヴァルデンフェルス家のフリッツ (Fritz von Waldenfels) がクローナッハ近郊でニュルンベルク商人の荷車を襲撃し、その後 1443 年 11 月 16 日にニュルンベルクに対してフェーデ状を送ったことに端を発した係争である。それに引き続き、フリッツの兄弟やヴァルデンフェルス家を支持する貴族らがニュルンベルクの領地や市民を襲撃した。これに対し、ニュルンベルクは部隊を編成し翌年 1444 年 2 月 26 日にヴァルデンフェルスの領地に進軍した。Müllners Annalen, S. 365-370.

<sup>26</sup> Zeilinger, *Lebensformen*, S. 55.

<sup>27</sup> Fleischmann, *Rat und Patriziat*, S. 1048.

<sup>28</sup> Müllners Annalen, S. 348, 354, 355, 358.

<sup>29</sup> Mendheim, M., *Das reichsstädtische, besonderes Nürnberger Söldnerwesen im 14. und 15. Jahrhundert*, Leipzig 1889, S. 7; Sander, P., *Die reichsstädtische Haushaltung Nürnbergs. Dargestellt auf Grund ihres Zustandes von 1431 bis 1440*, Leipzig 1902, S. 166. この地区は 1449 年の開戦以前にはペグニッツ川北部のゼバルト市区に 4 地区、同川南部のローレンツ市区に 2 地区の計 6 地区に区分されていたが、後者の市区発展の影響でゼバルト地区同様 4 地区に区分されたため、計 8 地区となった。

<sup>30</sup> Sander, *Haushaltung*, S. 171; Mendheim, *Söldnerwesen*, S. 22. そこでは上から順に、最も優れた隊長達 (diejenigen der besten Hauptleute)、中間の人達 (die der mittleren)、最も価値の低い人達 (die der geringsten) の三段階に分かれていた。

<sup>31</sup> Sander, *Haushaltung*, S. 169.

<sup>32</sup> Mendheim, *Söldnerwesen*, S. 18.

<sup>33</sup> *Die Chroniken*, S. 249f

<sup>34</sup> Mendheim, *Söldnerwesen*, S. 23.

<sup>35</sup> Müllners Annalen, S. 431f. この調査によれば当時ニュルンベルク市内に 28332 人がいた。

<sup>36</sup> 注 29 を見よ。

<sup>37</sup> Sander, *Haushaltung*, S. 144.

<sup>38</sup> Ebd., S. 144.

<sup>39</sup> Kern, T. v. (Bearb.), Die Berichte über die Schlacht bei Pillenreuth, in: *Die Chroniken*, S. 483-491; Sander, *Haushaltung*, S. 184 右の図 III を参照のこと。

<sup>40</sup> 1449 年 6 月 29 日の都市参事会会議にて、ロイス・フォン・ブラウエンには軍事に関する全権を与えることを議決している。Ratsverlässe, S. 54f.

<sup>41</sup> Kern, Die Berichte, 484f.

<sup>42</sup> Müllners Annalen, S. 449; *Nürnberger Totengeläutbücher*, T. 1: *St. Sebald 1439-1517*, Burger, H. (Hg.), Neustadt a. d. Aisch 1961, S. 27, 806 (Christein Imhof sun), 815 (Wilh. Haller). 1449 年には戦闘による被害や、都市の環境悪化により蔓延したペストの被害により、多くの都市門閥家系を含む都市住民が死亡した。Die Chroniken, S. 342-346; *Totengeläutbücher*, S. 22-30.

<sup>43</sup> Müllners Annalen, S. 486. 歩兵隊は槍歩兵隊、弩部隊、小銃隊によって構成されていた。

<sup>44</sup> Sander, *Haushaltung*, S. 183f.

<sup>45</sup> 中世ドイツ軍事史に関しては Schmidtchen, V., *Bombarden, Befestigungen, Büchsenmeister. Von den ersten Mauerbrechen des Spätmittelalters zur Belagerungsartillerie der Renaissance*, Düsseldorf 1977; ders, *Kriegswesen im späten Mittelalter. Technik, Taktik, Theorie*, Weinheim 1990 が詳しい。

<sup>46</sup> *Die Chroniken*, S. 308f.

<sup>47</sup> Schulze, *Freiburgs Krieg*, S. 39.

<sup>48</sup> Zeilinger, *Lebensformen*, S. 97.

- <sup>49</sup> Ohler, *Krieg und Frieden*, S. 50f.
- <sup>50</sup> Zeilinger, *Lebensformen*, S. 99f. 彼は *Die Chroniken*, S. 170 を参照している。
- <sup>51</sup> *Müllners Annalen*, S. 438; *Die Chroniken*, S. 156.
- <sup>52</sup> *Müllners Annalen* ならびに *Die Chroniken* の記述をもとに作成した。なお、襲撃対象数はあくまでも都市や村落の固有名詞が判明しているものだけを含んでいる。都市部隊が遠征の途中にも村落(Dörfer)を焼き討ちにした記述が多数みられるが、それについては対象数に含んでいない。
- <sup>53</sup> *Müllners Annalen*, S. 440-442. 紙面の都合上停戦協定の内容は省略するが、協定の全文は *Die Chroniken*, S. 161-167 にて確認できる。
- <sup>54</sup> この図も表と同様に、*Müllners Annalen* ならびに *Die Chroniken* の記述をもとに作成した。また、史料記述からわかる範囲での記載に留めてある。
- <sup>55</sup> *Die Chroniken*, S. 256.
- <sup>56</sup> Ohler, *Krieg und Frieden*, S. 51.
- <sup>57</sup> Ebd., S. 443.
- <sup>58</sup> Ebd., S. 453.
- <sup>59</sup> 戦争役の一入であるエルハルト・シュルスターブは戦争の機運が高まる 1449 年 6 月 25 日にはすでに、戦力の補強としてスイス傭兵の派遣を打診していた。しかしながら交渉は難航し、1450 年 1 月 6 日の再打診を経て、1450 年 4 月 26 日にようやくスイス傭兵はニュルンベルクに到着した。その際に都市に派遣されたスイス傭兵の規模は 800-1000 名であったとされる。
- <sup>60</sup> Ebd., S. 471.
- <sup>61</sup> Ebd., S. 444.
- <sup>62</sup> Ebd., S. 438.
- <sup>63</sup> Ebd., S. 439f. 都市年代記における同遠征に関する記述では、捉えた農民の数を 40~60 としている。*Die Chroniken*, S. 160.
- <sup>64</sup> *Müllners Annalen*, S. 451.
- <sup>65</sup> Ebd., S. 458.
- <sup>66</sup> „Fünfundzwainzig nürnbergische Reisige haben zwischen Neuhoff und Erlabach 6 Mühl abgebrennet, in denen viel Getreid verbrunnen.“ Ebd., S. 453.
- <sup>67</sup> Ebd., S. 466.
- <sup>68</sup> Ebd., S. 436.
- <sup>69</sup> Ebd., S. 436.
- <sup>70</sup> Ebd., S. 451.
- <sup>71</sup> Ebd., S. 472.
- <sup>72</sup> Ebd., S. 458-462.
- <sup>73</sup> Ebd., S. 462.
- <sup>74</sup> Jucker, *Plünderung*, S. 60.

## **Das Kriegswesen und die Überwindung der Krise in der spätmittelalterlichen deutschen Stadt Ein Blick auf den Plünderungsauszug Nürnbergs im 15. Jahrhundert**

**Heki TANAKA**

Die vorliegende Arbeit widmet sich nicht nur dem Kriegswesen der Stadt Nürnberg, sondern auch dem Auszug für Plünderung in dem süddeutschen Städtekrieg(1449/50). Gabriel Zeilinger erwähnte in seiner Studie sowohl Kriegswesen von Nürnberg in diesen Krieg als auch bis auf persönliche Ebene, vor allem Erhard Schürstab, Bürgermeister und einer der Kriegsherren, und Hans Rosenplüt, Handwerker und Dichter. In seiner Studie gibt es aber kaum einen Blick auf den Plünderungsauszug Nürnbergs. Norbert Ohler zeigte, dass zur Bestreitung des Lebensunterhaltes und als Vorsorge für das Alter Krieger auf Beute angewiesen waren. Michael Jucker hob eine Beute als wichtigen Teil der Kriegswirtschaft des späten Mittelalters hervor. Die meisten Stadtbewohner waren jedoch keine Krieger, sie nahmen vielmehr als Nebenberuf, Aufgebot oder Freiwillige an der militärischen Aktion teil, nach denen wenig geforscht wurde. Aufgrund zwei Chroniken sollten sich daher die Art und das Ziel vom Plünderungsauszug Nürnbergs in 1449/1450 erklären.

Nürnberg in 15. Jahrhundert hatte ein hartes Stadtregiment von Geschlechtern, die eine Sonderstelle in der Stadt bezogen. In Kriegszeiten bildete sich in dem Rat von Nürnberg ein Gremium, Kriegsstube benannt, das militärische Gewalt hatte. Unter Kriegsherren in diesem Gremium leistete die Stadt während der gesamten Dauer des Kriegs die Kriegsführung, und die Kriegsherren organisierten die Stadtruppen, an der die Stadtbewohner mitsamt Geschlechtern teilnahmen.

Die Strategie von Nürnberg war nicht das Angreifen gegen gegnerischer Zentralstelle oder Hauptmasse, sondern sowohl Zerstörung vieler kleiner Städte, Dörfer und Mühlen als auch die Plünderung des Viehs in gegnerischem Gebiet. Einerseits schädigte Nürnberg die gegnerischen Führungskräfte, andererseits erwarb sie zahlreiche Nahrungsmittel. Die Plünderung war daher notwendig für die Fortsetzung der Kriegsführung und Überwindung dieser Krise.